

えられ苦勞したお陰と感謝してます。歌の文句のごとく「泥水すすり草を噛み」は本当だった。心の片隅に戦のない平和を願っています。

大陸戦線の想い出

宮城県 今野 栄 志

昭和十七（一九四二）年八月一日、仙台東部第二十二部隊に入営。中支派遣第一〇四連隊（鏡部隊）第二大隊第六中隊要員として、勇躍懐かしの故国を後にしたのは同年の八月末日。九月二日に宇品港を出帆、上海に上陸、直ちに軍用トラックに乗せられて南京まで行き、ここからは揚子江を船で溯航して越景河という街に到着した。ここで部隊編成後、この地で戦局が急変し我々はわずかに三カ月の短期で一期検閲を終え、直ちに江南作戦に参加した。

大本営は支那派遣軍に対し、重慶作戦の準備を命じ、作戦開始を昭和十八年春以降の予定とされてい

た。このため漢口の第十一軍司令部は、宜昌にいた第六十三師団と第三十九師団を以後作戦のためか、我が青葉師団・第十三師団と交代を命じたのである。第十三師団は、昭和十二年支那事変が始まると歩兵第六十五連隊（福島県若松）、第一〇四連隊（宮城県仙台）により再編成された師団と聞いている。歩兵第一一六連隊は、新潟連隊で第五十八連隊は南方に転戦され、新装の第三十一師団となった。第五十八連隊の警備地であった所に我等第二大隊第六中隊が鴨原中隊長以下警備を継承することになった。

昭和十八年の初頭、昭和十七年徴集の現役初年兵が到着し、中隊の戦力も増加した。新警地には飛行場があつて、一月十日の陸軍記念日を祝し、軍旗奉拜を挙行した。この直後、敵機P51三機が襲来、機銃攻撃の雨を降らせた。我が軍はこれに対し、重機関銃にて応戦、三機中二機を撃ち落とした。我が軍の重機関銃は支那作戦戦線においては威力を発揮し、敵からも恐れられていたのである。当時、敵機を撃墜すると「感

状」が出て殊勲甲であった。

その後、我が第二大隊は、第三師団主力が大別山系に駐屯している敵を攻撃討伐中、留守部隊が敵襲を受けたため一番近くにいた第二大隊、皆塚大隊に徳安警備隊救援に向かうようにとの命令を受けた。警備隊員は直ちに明日の朝食と夕食を飯盒に詰めてトラックに分乗した。車は休みなく走った。運転する自動車隊も大変だったと思う。夜も白々と明るくなった。まだ山の向こうから散発的に彼我の銃声が聞こえる。いよいよ警備地が近い。間もなく一戦を交える時が来ると思ったら、吐く息も白く見えるようになった。じっとしていられなく、足踏みをして暖を取るより方法はなかった。雷光店付近に近づいた時は硝煙の臭いが漂っていた。

敵はいち早く我が援軍の到着を知ってか、逃走して姿は見えなかった。小休止をし、冷たくなった飯盒の飯にかじりついた。それでも腹がすいているので、誰も腹痛などおこす兵隊はいなかった。警備地の異常の有無を確認して帰隊する。それから何日も経たないう

ちに連隊は沙市東方において特殊訓練をすることに
なった。

沙市は大きい港街であり、荊河と言う所は三国志でも有名な中国三大城壁の一つとも言われた古城街である。この街には第十三師団司令部もあり、荊河には連隊本部があり、歩兵第一〇四連隊の第三大隊は襄西地区の警備に就いていた。我等の部隊のいた所は今までの地形とは異なった平坦地で風雪が頬をなで風は強く、満州の荒野で演習をしているようだと、第二師団が満州にいた時の古参班長が話していたことが思い出される。

今度の作戦は漢陽、沙市、揚子江に挟まれた三角地帯で、中国では正月（春節）と言っていた二月上旬、警備を第三大隊に委ね、連隊主力は沙市付近に移動集結する。二月十六日、日没を期して作戦行動を開始した。資福寺陣地を出発した。暗い晩であった。そして敵の前衛陣地地点に達し第一回の銃火を交わした。敵も激しく攻撃して来る。戦闘に慣れている古参兵の話では、夜の場合は、弾丸の音が「ヒューン！」という

のは頭上を通る音だから恐ろしくはない。「ブスー、ブスー」という音、あるいは「バキーン！」という音は「近距離からの射撃弾だから気を付けろ」と教えてくれた。

第一回の交戦で我が第六中隊（鴨原中隊）では二人の負傷者を出してしまった。私の隣村で本水という者と菅野の兩人が足をやられた。その翌日の攻撃陣地は堅固に構築されており、我々歩兵だけで攻撃するのは到底困難である。隊長は砲の援護がなければ近寄ることは犠牲者を多く出すだけだと判断、山砲隊の援護を要請した。

まず山砲の攻撃から始まり、我が鴨原中隊は尖兵となり、砲の援護を受けながら敵陣地に接近する。敵の数は二、三〇〇人はいるようだ。迫撃砲、チェッコ機関銃、小銃等の射撃はものすごく、砲撃の炸裂音、銃声の耳をつんざく音である。敵陣地に進むのには水のない堀や運河の堤防に沿って前進する。敵も側方を利かして攻撃して来るのでなかなか前進するのに難渋であった。敵陣地は円形で、レンガを積み上げ、その上

を粘土の土で固めた頑強な陣地であった。我が軍は山砲や速射砲で攻撃するも、表面の土煙が上がるぐらいでびくともしない。盛んに砲の連射攻撃をし、我が鴨原中隊は工兵隊の援助も受けながら一步一步前進、陣地の銃眼に近付く。これは命がけの前進であった。

中隊長は自ら工兵隊の作業隊と協力し、また決死隊は銃眼に接近手榴弾を投入した。敵もまた応戦して投げてくる。保塁は土煙で見えなくなる。敵も必死でこの第一壘（トーチカ）で我が軍の進撃を食い止めようと頑強に抵抗するが、我が鴨原隊と工兵隊の攻撃に降伏し、ついに白旗を掲げて次々と投降して来た。しかしこの戦闘において、我方も負傷者や戦死者など数多くの犠牲者を出したことを忘れられない。

また敵方が投降した後にトーチカ内で炸裂音が聞こえたので外山伍長が中に入って調べてみたら、自爆したのは敵将校であったことが確認され、敵ながら責任を取ったあっぱれな姿であるということを後日知った。第十三師団長赤鹿理閣下より賞賛されたとのこと知らされました。

その後、中隊は連隊主力に追及すべく後を追った。第一壘陣地が陥落したので敵將はすでに船で逃走していた。やがて連隊に追及した時には、東方付近で第一大隊及び第二大隊は激戦中で、砲声がすぐ接近のように聞こえた。

そのころ敵の第一二八師長も我が第四十師団の騎兵隊によって捕らえられた。大休止の後、目的を達成した我が隊は約五十日ぶりで帰隊した。この作戦に出動した隊員の中には残念ながら一緒に帰隊できなかった気の毒な戦友があり、茶毘に付され遺骨が戦友の胸に抱かれての無言の帰隊となった。また負傷者は野戦病院に入院する者、あるいは漢口の陸軍病院に入院する者など負傷者も多かったようだが、名前などは覚えていない。

その後、警備交代があり、我が鴨原中隊は石套子、対岸は瀧市で、その瀧市には不明だったが支那軍が何個師団位かはいて、しかも土匪の姿をして我が軍の秘密調査のため揚子江を渡河して来ることもあるので油断は禁物であった。また小舟に小荷物を積んで農民に

化けて渡河して来る敵兵などもいた。捕らえてみると敵兵であることが判明、直ちに捕虜とした。

江南殲滅作戦について宜都作戦

我が第二大隊第六中隊は四月に入り石套子から揚子江を渡り、敵の威力偵察を兼ねて出撃を開始した。瀧市で敵は頑強に抵抗したが、これに対して我が軍は歩兵砲、重機関銃をもって反撃したので敵は後方に敗走した。この頃、第一〇四連隊旗手をしていた石山剛中尉と第六中隊の第一小隊長だった増森少尉との交代があり、石山中尉が我が隊の第一小隊長となった。石山中尉は、陸士第五十四期生で現役将校バリバリであった。

その頃沙市においては、工兵隊は折畳式の船の搬送、乗船、下船あるいは上陸時の動作または船の修理、さらに沈没時の脱出行動など熱心に訓練をし、作戦に備えていた。

いよいよ五月に入ると我が警備地には毎夜のように他部隊が通過していて、そのうち我が一〇四連隊にも

出動の命令が来て揚子江下流約七十キロの所に集結した。第二大隊はそれぞれ中隊毎に宿営し、今暁、揚子江を渡河して、その日のうちに敵前に突入せよとの命である。今まで渡河作戦は演習などでは行ったことがあるが、実戦は今晚が最初であった。対岸には敵砲火が待ち伏せている中、工兵隊の船に乗船した我々は、友軍の山砲、重砲などの援護射撃を受けながら約百六十隻の舟艇に分乗、船はエンジンの音もけたたましく、フルスピードで船は進んで行った。船板に身を低く伏せた。

上陸間近になったら、敵もさるもの、迫撃砲やチェッコ機銃あるいは水冷式機銃にて雨霰の如く猛射して来た。敵の弾着もよく「シューシュー、ボジャボジャ」と川面に音を立てる。しかし幸いにも敵弾は川には落ちるが我々の舟には当らなかつたので一人の犠牲者もなく全員上陸、直ちに小高い山の裾まで一気に突撃する。敵は山上に上り、時々撃つて来るが、夜間の弾丸は頭上を

「ヒューン」と飛んで行くだけなので心配はない。む

しろ対岸にいた友軍にかなりの負傷者が出たという事を後刻聞いた。

夜空に「ドカーン、ドカーン、ドドン」という師団の援護である重砲、山砲の音がする。そのうち敵も攻撃威力がなくなり退却しようだ。我が鴨原中尉は尖兵を命じられ、山腹に居る敵に対して攻撃を開始した。夜は白々となって朝を迎える。軍公路は各所で切断され、砲兵隊の駄馬部隊は通ることができず、道路を補修しながらの前進で、かなりの苦勞の連続であったと思う。その後、宜都までは高さ六、七百メートルの山々でどこから攻撃して来るのかわからない。ただ無我夢中である。敵はものすごい猛射撃である。この攻撃で我が部隊の各中隊でもだいたい負傷者や戦死者も出たらしい。それに山越えでの戦闘である。すでに弾薬も食糧もなくなり、困ったことに駄馬の落鉄にはどうしようもない。友軍の飛行機で運んでもらって蹄鉄を補うという方法をとった。

一番難渋をしたことは、あいにく毎日連続の雨で、川も氾濫し前進を防げたことであつた。敵は容赦なく

抵抗し攻撃をしいた。ところが爆音が聞こえてきた。それ敵機かと木陰に身をかくして空を見たら友軍機である。友軍機の二機は正面の敵に対して機銃掃射を浴びせる。我らは突撃を敢行し敵は敗走してしまった。そこには建物があり、敵の兵舎であったようだ。

その後は、さほどの抵抗もなく宜都の街に到着した。第二大隊第五中隊は駄馬部隊、衛生隊、經理班などを率いる相馬部隊を護衛のため都鎮湾という所に進軍した。我が皆塚大隊は宜都に到着したが、第五中隊駄馬部隊を率いる山本中尉も宜都に到着しているはずが着いていなかった。三日間ほど到着するのを待って收容した。第一〇四連隊及び師団は宜都河を渡って警備地に向かっていた。我が皆塚部隊は、駄馬部隊を援護しながら警備地に帰らなければならない。ところが長沙方面に向かっていた敵の大部隊に遭遇し、前進も後退もできず包囲されてしまい、苦戦に陥り、山本中隊長以下全滅の危機にさらされる運命となった。しかしこの時、神の助けか天の助けか大雷雨となり、一〇メートル先も見えないほどの土砂降りでは川は氾濫し、

それを利用して川中に飛び込み脱出したのである。そして敵の追尾の救援に駆け付けた皆塚大隊も、食べ物も弾薬もなくなり、尖兵に出陣していた鴨原中尉第一小隊長の所まで進出した。

この時、自分も側にいた鈴木副官と四人で皆塚大隊長に戦況報告中に、大隊長は至近距離から軽機のねらい撃ちで壮烈な戦死を遂げられたのでした。その晩、我々第六中隊では小川曹長が第二小隊長代理となり、その他一個小隊が中隊本部の上の高地の配備に就いて、中隊本部と第三小隊の平山見習士官が一緒の所にいた。そしてその向こうの小高い丘に第一小隊平山中尉が配備にいた。敵はこちらの威力調査を兼ねていつ来襲するかわからないという、急迫した状況に置かれていた。時々聞こえる銃声から判断すると第七中隊のいる方向にも敵は回っているようだ。これではここもいつ敵が来るかもしれない。四方の山には所々灯が見える。包囲作戦に出ているのかもしれない。兵は皆疲れているので睡眠する者もいた。

そのうち小川小隊より「敵襲！」の声。そしてもう

陣地はもたないとの連絡である。鴨原中隊長以下指揮班、第三小隊の平山見習士官が駆けつけるが敵はすでに高地に上がり、第二小隊小川曹長と三〇メートル位の距離となり、手榴弾の投擲合戦で小川小隊全滅という状態になった。しかし中隊長以下平山小隊による「突撃！ 突撃！」の繰り返しでついに高地を奪還、白兵戦をもって敵を退却させ、高地を再び陣地としたのだったが小川小隊は散々な目に遭ってしまった。我方の損害は負傷者、戦死者が続出して大隊の医務班に下げ治療をしてもった。

この戦闘では中隊長は負傷、平山小隊長は戦死したのである。佐々木君と私は、夢中で石山第一小隊に連絡にかけつけ戦況を報告説明する。しかし直ちに第一小隊の石山小隊が駆けつけて突撃し、戦死された平山第三小隊長の死体をようやく後方へさげることができた。

二人の死体を並べ黙礼をしている時にも敵はまた逆襲に転じてくる。敵が手榴弾を投げて攻撃して来た時、その破片を右腕、顔面に受けた者も出たが我が中

隊は平山小隊長や戦友の仇を討つことができた。あの時のことは今なお忘れることはできない。しかも戦死された石山中尉と平山見習士官は中隊付幹部と教官という間柄であった。この悲報を知って連隊本部の宜都より救援に駆けつけてくれて九死に一生を得たのである。何としても忘れる事のできない、また後味の悪い作戦でもあった。そして連隊に救援された我々は警備地へと帰った。

師団の経理駄馬隊一〇〇以上の護衛をし、本隊は別行動をとり反転するという作戦は、敵の作戦戦法を知らなかった参謀の間違いでもあったのかもしれない。我が大隊と連隊があれだけ苦戦をしているのに既に本隊は基地に帰還していたとは甚だ以って遺憾であり、犠牲者に対しても申し訳ないものと終生忘れられず五十有余年経った今日でも夢を見ることがある。

江南作戦も終わり連隊は荆州付近の警備に就いていた。折しも敵の大部隊は常德一帯に集結し、反撃を企図しているとの情報であった。

常德作戰

十一月初旬、警備地を出発し揚子江を渡って常德に迫るこの度の作戰には、十七年徵集の現役兵が初めて参加する。漢口には第十一軍司令部があつたような気がする。常德作戰終了間際にどこの部隊だか敵に包囲され、弾薬、食糧もなく、戦死または負傷者続出、運を天にまかせるしかないと思っていたら、そこを通過する部隊により援護され、これまた九死に一生を得たと地名まで掲載された会報の記事を読み、あるいは我が第一〇四連隊ではないかと、後任の中隊長の大場大尉が書面で問い合わせたところ西村か西脇かの旅団の一個中隊であるということで、大場中隊長と一晚中寝ずに話し合ったという。

こんなことを連隊情報で知る事ができたが、このように我々が江南殲滅作戰において敵に包囲され、同じ戦況下で苦勞されたことが脳裏に浮かんで来た。その後、我が連隊は師団命令で湘桂作戰に出撃した。応城という所に集結し、作戰準備に追われる毎日であった。

いよいよ昭和十九年五月二十七日の海軍記念日を期して行動を開始した。真中は第三師団、右翼は第十三師団、それに支那派遣軍直轄の第五空軍とものすごい兵力の作戰で、敵の空軍基地である桂林飛行場奪還が目的である。九月九日、作戰開始の発動命令が出る。

出動した時は皆夏服での行動で、作戰開始以来約八カ月に及ぶ長期戦であり、十二月上旬まで三千キロにわたる戦闘であつた。その間、兵は寒さのため師団長命で中国人の衣服を着て、まるで仮装行列のごとく、これが日本兵とは見えない姿であつた。後方よりは輸送が困難で、とくに米英両国の空軍の攻撃のため軍のトラック輸送はまったくできなくなり、食糧のほとんどは現地での徵発によって食するしかなかつた。昼間は敵に発見されやすいので夜間徵発に出かけるのだが、各隊も同じような行動をとるので、暗くて遠くの方から見た時、敵か味方か判断できないことが度々あつた。しかも衣服が中国服を着ている者もいたので友軍同志が撃ちあつたということもあつた。

部隊は独山より反転し、我々第六中隊は広西省の東

江という所で、第二中隊は思恩という所を警備し、そこには第六中隊もいた。第六十五連隊は壘東江まで、我が一〇四連隊は思恩まで馬で運搬、昼間は敵の飛行機に攻撃されるので夜間の作業だった。敵地には重慶軍の他に自警団が組織されており、自村の警備と日本軍進攻から婦女子を守る役目であり、普通は農民の姿をしていてどこに隠しておくのか、銃を持って抵抗して来たのには散々悩まされたものであった。また夜は便衣隊となって軍公路の両側に隠れていて我が軍のトラック隊、駄馬部隊などを襲撃することが度々で、急報を受けて駆けつけてみるとさっさと逃げてしまうというゲリラ隊でもあった。

四月初旬より新しい作戦の話が持ち上がった。今度の作戦は決死的作戦で敵地深く侵入して、後方から敵の退路を遮断するという任務である。この作戦に参加するのは連隊全部ではなく、我が第二大隊一個大隊である。第三師団と第十三師団で都安付近の敵を挟撃し、江河沿岸の退路遮断して撃滅する計画であつ

た。

第二大隊長（皆塚大隊長戦死の後任）に永田達夫少佐が大隊長となる。今までの作戦と違い一個大隊全員が便衣に服装を変え、中国兵のように弾帯も肩から掛け、軍靴ではなくわらじを作って履き、食器も腰にぶら下げるなど中国兵に偽装して敵地奥深く侵入するのである。途中落伍者が出てついて行けない者は、自分で自分の処置を覚悟する事と決めて出発する。我が中隊は途中大隊本部と離れ、重機関銃及び無線通信隊が配属されて対岸に渡り、敵の背後に出て退路を遮断することに成功し、退却する敵に対し多大なる損害を与え捕獲、殲滅することができ、作戦は功を奏した。そして部隊は前進し龍頭という所に到着する。

ここは第十中隊の警備地で、治安関係も良く、我が第二大隊の服装を見るなり啞然として見ている。衣服は便衣の服装で弾帯と米袋を肩にあやに掛け、竹筒を腰に下げて銃は思いおもいに担ぎ、どう見ても日本の兵隊とは思われない姿であった。第十中隊の連中は敵が来たのかと思いびっくりしたそうだ。

休憩する時間もなく十八日、日没を期して行動を開始した。大きな草木すら生えていない岩山の中腹に道路がある。第五中隊は尖兵となり、道案内に中国人とそれに宣撫班数人とで回りくねった道路を一系列縦隊で音も立てずに前進して行く。この夜は月明かりで前後はよく分かった。約七、八キロ位前進したところで急に前方から撃つて来た。約五、六〇メートル前方のようだ。ちょうど撃っている正面は大隊本部と我が第六中隊である。

中隊長は自分より三、四人後方を歩いていたのだが「軽機前へ！」と号令して軽機にて応戦に転じて突撃した。しかし敵はすでに後方に退却したが、この時中隊長は腰部貫通にて出血多量で残念ながら戦死された。中隊長が戦死されたので、第五中隊の大場中尉が第六中隊長となった。

江河に出るまでには幾度か自警団からの攻撃を受けたが大きな岩山の裾を通り対岸の近くへ出た。対岸はやや平坦地のように見えるが奥の方はやはり山脈になっている。しばらく行ったところで江河に到着し

た。ここで大場中隊長は分隊長以上を集め作戦を練った。対岸に渡って敵を殲滅する命令だがどうしたらよいものかと。そんな時歩哨より報告が来た。「対岸には敵の大部隊が通過中のようです」との報にて、部落の家の陰から双眼鏡で観察したところでは、山砲、迫撃砲を有する大部隊が通過中と判明できた。さらには部落民の通報があつたのか、敵はチェッコ機銃をもって攻撃して来た。

大場中隊長はこれに対し「絶対に撃つな」と命令を出し、配属された重機銃を右側の陣地に配備し、渡河して来る敵に攻撃の準備を整えて今か今かと待っていた。そこへ無線連絡にて「第二大隊は直ちに反転復帰すべし」との命令があり、我々は対岸の敵の動向にはかまわず待つてましたとばかりに反転を開始した。我らの行動を察知してか敵は対岸より迫撃砲やチェッコ機銃で攻撃して来た。我方の装備はこの時は重機のみで砲は配備されていなかった。重機は分解して搬送しなければならぬ。畑の中で敵の攻撃の止むのを待つていたら、こちらの服装を見て、どうやら同じ中

國兵と見たらしく一発も撃って来なくなる。あるいは自警団と見間違えたのかもしれない。

しかし敵は二、三千人位の大部隊であるのを高い山の上から確認することができたので、ただ見過ごすこともできないので、機関銃中隊に我が第六中隊は各小隊毎に分散して山へ登り、無線連絡を待った。しばらくして「大隊は復帰すべし」との連絡にて無事本隊に帰れるのかと胸をなでおろした。

翌日、師団命令で作戦を中止撤退することになり、高い山越えをして警備地に復帰することになった。今回の犠牲者は中隊長と中隊に配属された機関銃小隊にも二、三人の戦死者があったと聞いている。その後、師団命令により五月下旬頃、東江河を撤退、思恩において第二大隊の指揮下に入り、毎日敵機の空爆を逃れて裏山へ退避した。しかし昼間は米英空軍の機銃掃射で激しく攻撃の手をゆるめなかった。そのうち都安作戦は、支那派遣軍の作戦命令にて、第三師団と第十三師団を南京方面に転進させるための作戦のため中止命令が出されたそうだ。

敵機の基地、桂林攻略には第十三師団の鏡兵団は桂林に向かつて南下、遂に桂林飛行場を陥落させることができた。桂林より岩山に入り敵の急追が気になる。警備隊が敵の夜襲を受けたが、突撃して敵のチェッコ銃を持っていた兵を二人ほど捕獲して大隊の宣撫班に連れて行った。この捕虜を尋問したところによると、近いうちに米英の新兵器を有する米英軍の指揮の下に重慶の正規軍が大反撃をするということが判明したので、第六中隊は今のうちに前方の小丘を確保せよとの大隊長からの命令である。第六中隊は敵が少数のうちに占領しておかないと後になっては大変と、中隊長は第一小隊に突撃隊を編成し七月の上旬、潭下坪の宿舎を出て闇夜を利用して進撃する。

山岳は背丈位の草木にて進むにもなかなか難渋である。これでは未明までに到着、攻撃ができないではないか、と中隊長は気をもむ。そうこうしているうち、周囲の草木も薄く見えるようになる。夜明けとなり周りも見渡せるようになった。中隊長は第一小隊の阿部分隊に突撃命令を下した。敵兵はまだ居眠りをしてい

るのもいたが、敵兵を刺殺、さらに分哨小屋に突入した途端驚いた敵はチェッコ機銃を乱射して来た。この弾丸で阿部分隊長は腹を貫通され即死、それに茂木、池田両上等兵は足と腕をやられて負傷した。敵陣地は占領することができ、負傷者は桂林の野戦病院に収容したが、その後の消息は不明である。

その後二、三日は大した戦いもなく経過した。前にもどるが敵の分哨地より稜線越えに二、三〇〇メートル先に掩蓋陣地があり、そこから銃眼を揃えて我が方に反撃して来たが、相沢分隊長の率いる分隊がこれを攻撃したので敵は陣地を放棄して敗走し、山を下りて退却してしまつた。これで敵は山上からの攻撃はできなくなり、散々の態で攻撃は中止してしまつた。しかし重慶正規軍の援軍を待つ戦法だつたのかも知れない。そのうち大隊通信隊が有線を張って敵状を報告していたが、翌日午前十時頃電話線が切断され連絡が取れなくなつてしまつた。

稜線より向こう側の軍公路を敵の大部隊がとぎれることなく北上しているのが肉眼でもはっきりと見え

る。遠くの方で銃声が聞こえるが友軍の銃声ではないらしい。大場中隊長は急遽この状況を大隊長に報告、その後の作戦命令を受けなければならないと考えている時、七月二十三、四日頃と思う、中隊長より宮本、今野、三浦の三人が呼ばれて「早くこの状況を大隊長殿に報告し今後の作戦に備えるべく、困難な任務ではあるが三人のうち一人になつても状況報告をしてくれ」と涙ながらに依頼されたのであつた。もし中隊が孤立するような場合は焚火を一カ所に焚く、二個小隊撤退の余儀なくされた場合は二カ所に焚く、三個小隊全部が撤退の場合には三カ所に焚く。これを信号とする、と命じ、我ら三人は午後八時二十分頃山を下り、私が先頭に立つて出発した。

山岳の半分ぐらゐまでは何の変わった事もなく撤退したのだったが、宮本さんが「おい今野、このまま下りて行ったのではいつ敵に見つかかるかも知れない。今しばらく時間を置いて下る事にしよう」と言う。宮本さんは私たちより一年先輩で作戦には幾度も出動しており、すごく経験も度胸もある先輩だつた。後は宮本

さんの考え方に委ね、山を横切り、攻撃した方角に向かったが、敵の歩哨が立哨している。また山岳を横切り、三人で相談しながら、このままでは任務は達成できない、夜間を利用して敵の陣地内を通らなければ大隊本部に行くことはできない。音を立てずに、静かに静かに敵陣内を通過する。歩哨は気付かず、我々は第八中隊のいる方向を目標に前進する。

歩哨も陣地内に日本兵かいようとは夢にも思わず煙草をふかしていた。この時とはばかり宮本さんは一撃のもとに歩哨を刺殺してしまった。上流に走り三人が無事である事をたしかめ、五〇メートル位の川幅があったようだが胸まで水につかって第八中隊に到着することができた。そして状況を中隊長に報告し、命令受領者の案内で小野大隊長に報告したのが午後の十一時であつたと思う。

小野大隊長は報告を聞き、十分か十五分位うつむいていた。沈痛な思いであつたのだろう。冷静な口調で「一個小隊を残し、中隊長以下二個小隊を撤退するよりに合図の信号をせよ」と命令をした高地から見える

所に、二カ所、四、五〇メートル位離して信号を送った。大隊長殿は兵の前で「ご苦勞であつた。明朝からは激烈な戦いになるだろう」と悲壮なる決意であることを告げ、夜目には見えなかったが、各々の胸に決意のほどが感じとられた。しかし山の高地に向け信号は出したものの、果たして中隊長以下帰つて来られるのかと心配で眠れない一夜を過ごした。

うとうととしているうちに外でガヤガヤ音がする。外に出て見たら、中隊長以下敵陣を突破して帰つて来たのだった。中隊長は「自分をはじめ隊員一同これからどうなるかと思つたが、お前達のお陰で九死に一生を得たようなものだ」と言われ、我々はただ感涙の至りであつた。しかし残つた行政小隊のことが心配である。

翌朝、夜明けとともに敵は大攻撃に転じてきた。我が第三小隊はこれに対し応戦し熾烈な戦鬪を展開したが、遂に弾薬等の欠乏を来たし、力尽き撤退の止むなきにいたつた。全員玉碎したものと思つた。自分は決死の伝令を命ぜられ小隊の玉碎の中にはいなかったの

で生を得たのだが、あの時伝令の命令がなかったら当然戦死していたのであろう。幾多の戦死された戦友に対し哀痛のいたりであった。

敵の攻撃はますます熾烈となり、遂に大隊本部および各中隊との連絡も断たれ、各隊は独自の戦闘となるしか方法がなくなった。そして第一〇四連隊の各隊は共に敵陣に対し突撃で死傷者もかなり出た、と後日の事であるが第十三師団の兵から聞いて驚いた。なぜ第十三師団がここにいるのか、すでに南京地区に撤退しているはずだがと疑問に思われた。

第十三師団は敵には恐れられていた強兵部隊であるので、敵は無理な戦いはするな、近いうちに日本は必ず降伏するのだからと言って戦いの手をゆるめたという。しかし我が一〇四部隊は節兵団の救援に急行し、第二大隊は夜襲等をもって突撃を続行、食糧、弾薬を徴発し、さらに戦闘を続行していたのだが、昭和二十年八月十七日、遂に停戦の命令があり、十五日に日本は連合国の前に全面降伏したのであった。

戦争に敗れたことが現実となった時、これから我々

はどうなるのかと飯も喉を通らなかつた。あらゆる激戦に勝ち抜いて来た強者どももただ気が抜け、人形のようにぼんやりと空を見ているのみである。ある若い士官学校卒の将校の中には、陛下に対して申し訳ないと自決した士官もあると聞いて哀痛のいたりであった。

我々は昭和二十年八月二十四日、夕闇の迫った野原で軍旗奉焼を行った。連隊旗手の第六中隊尾形藤男が奉持する軍旗に野口連隊長が一礼して点火すると薪が燃え、軍旗の房に燃え移り、房はくねくねと曲がって何とも言いようがない。連隊長はじめ将校、兵隊たちは皆涙が溢れすすり泣く声が伝わり、誠に悲哀の場となった事が忘れられない。

その後二カ月、揚子江沿いの流石橋まで行軍し、ここで復員船を待っていた。昭和二十一年六月十日、復員船に乗船、懐かしの故国の土を踏むこととなった。故国は焼土と化し、仙台の街も空襲で破壊され、県庁なども爆破されたのだった。自分は農家であったので空襲の災害に遭わず、自然の大地はそのままの姿で迎

えてくれた。しかし長い間の戦争のため物資は欠乏していたが、あの苦しい戦闘のことを思えば何事もできるだろうと、祖国日本復興のため働きに働いた。

やがて日本は戦争のない平和を願いつつ、産業、経済分野では世界の先進国となったのである。あのような同じ人間同士が殺し合う悲惨な戦争は、次代を担う若い人達には味わせたくないと、平和の尊さを念じつつ、私の戦線での体験の一端を語り、終わりとします。

北支河南作戦

戦車第三師団機動砲兵

千葉県 佐久間 正 夫

大正十（一九二一）年二月十一日、現在の千葉県市

原市に、農業と鶏卵の仲買を業とする家に生まれまし
た。市原市は現在は京葉工業地帯ですが、当時は千葉
郊外の海浜に近い農漁村地でした。家業は先々代から

続いており、私は七人兄弟の長男で、三代目跡継ぎと
いう立場でした。次男は既に海軍に志願をし、他の妹
三人、第二人の家族、私は適齢期となりました。

昭和十六（一九四一）年徴集兵の検査は、たしか五
月頃であったと記憶しますが、第一乙種合格、現役兵
ということでした。検査の前日、仲間と一緒に、牛久
の丸子という料亭（私の得意先）へ行つて、どうせ兵
隊に行くのだから（当時は兵隊検査を受けて、初めて
男として一人前だという風習が、我々の地にありまし
た）ということ、前祝いというか、そんな気分です
人位の仲間と酒を飲んだものでした。

徴兵官は、酒気を帯びていることは承知でしたが、
我々の心情を察したのか、半ば笑って見過ごしてくれ
たのでした。千葉の海岸ですから、漁師もおり農家も
ありで、都会とは違った、幾分、荒い気性の者も多
かったでしょう。

昭和十六年十二月には、大東亜戦争が勃発。ハワイ
や南方での戦勝の気分のある昭和十七年二月一日、入
営と決まりましたが、隊は東京世田谷の東部第十二部